

## 平成23(2011)年度

### 企画展 没後50年 森岡柳蔵展

4月9日～5月22日

入場者総数 3,966人

鳥取県出身の洋画家・森岡柳蔵の没後50年にあたり、フランス留学時の作品を含む初期から晩年までの作品約100点を展示し、その画業の全貌を紹介した。会場は第1・第2展示室で、師の黒田清輝や、交流のあった藤田嗣治らの作品も紹介した。

### 企画展 OCEAN! 海はモンスターでいっぱい

7月16日～8月28日

入場者総数 16,482人

海を舞台とした6億年の生物進化について、巨大なクビナガリュウや古代クジラ、現生の様々な海洋生物など約300点の貴重な資料を紹介する展覧会を行った。映像や体験コーナーなどを駆使して、年齢に関係なく楽しく学べる展示をした。

### 企画展 シリーズ 鳥取の表現者 File.03 大久保英治 あるくことからはじまる

11月16日～12月25日

入場者総数 1,751人

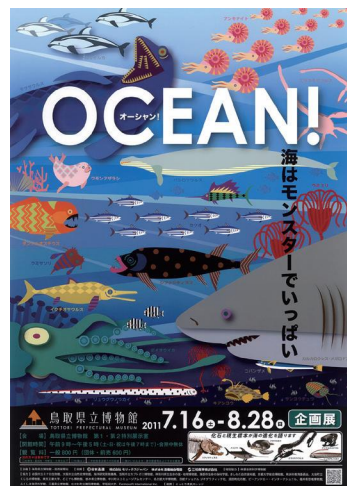
「鳥取の表現者」の第3回展として、鳥取県内に工房をもち、県内で様々なプロジェクトを展開してきた現代美術作家・大久保英治による「歩行」を契機とした作品を中心に、その仕事を紹介した。第1・第2展示室を会場に、公開制作も行なった。

### 企画展 鳥取鉄道物語

2月11日～3月20日

入場者総数 6,738人

明治45年(1912)に山陰線が「京都―出雲今市(現、出雲市)間で開通し、平成24年で100年になることにあわせて、鉄道を切り口に明治末から現代までの鳥取県内の近代化の歩みを紹介した。



平成24(2012)年度

企画展 没後50年・日本民藝館開館75周年  
柳宗悦展 —暮らしへの眼差し—

4月7日～5月20日

入場者総数 8,108人

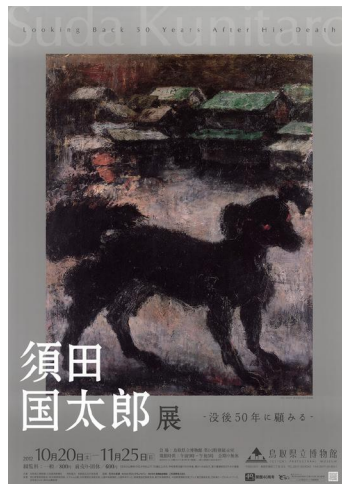
鳥取県とも縁の深い、民藝運動の創始者・柳宗悦の没後50年にあたり、柳が創立した日本民藝館のコレクションを中心に展示し、その眼と業績を紹介した。会場は第1・第2展示室で、山陰両県と柳の関係を示す鳥取会場独自展示も行なった。

企画展 大きなこ展

7月14日～9月2日

入場者総数 20,090人

鳥取県には国内唯一のきのこ専門研究機関があり、鳥取大学もきのこの国際的研究拠点をもつ。県内には野生のきのこも多く、かつ栽培も盛んに行われている。「きのこ」とはどんな生きものなのか、全国からの資料でわかりやすく紹介した。



企画展 須田国太郎展  
—没後50年に顧みる—

10月20日～11月25日

入場者総数 2,916人

日本近代洋画の巨匠の一人で独立美術協会で活躍した須田国太郎の没後50年にあたり、その画業を紹介した。会場は第1・第2展示室で、鳥取県岩美町田後を描いた油彩画や山陰各地を描いた素描を含め初期から晩年までの作品約130点を展示した。

企画展 発掘された日本列島2012・地域展  
鳥取の発掘クロニクル

1月12日～2月24日

入場者総数 3,368人

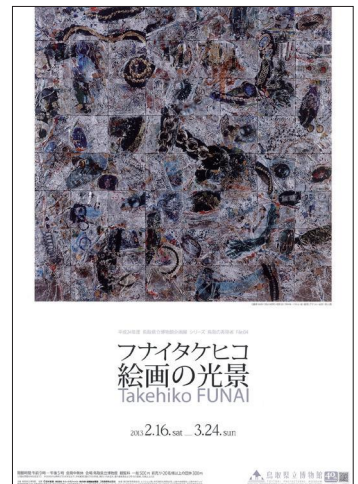
文化庁の巡回展で、近年注目を集めた日本各地の貴重な出土品20遺跡約570点を一堂に展示した。あわせて地域展「鳥取の遺跡発掘クロニクル」では鳥取県内でこれまで行われた主要な遺跡の出土品と近年の発掘調査資料29遺跡約550点を展示した。

企画展 シリーズ 鳥取の表現者 File.04  
フナイタケヒコ 絵画の光景

2月16日～3月24日

入場者総数 2,507人

「鳥取の表現者」の第4回展として、鳥取県出身の画家・フナイタケヒコの30年以上におよぶ多様な絵画表現の展開を紹介した。第2展示室を会場に、大学卒業後一貫して抽象表現の可能性を探究してきたフナイの絵画作品約200点を展示した。



## 平成25(2013)年度

### 企画展 サルとヒト展

7月13日～8月25日

入場者総数 7,758人

現生霊長類の剥製・骨格標本、原始霊長類の実物化石やレプリカ、古人類化石のレプリカなど約180点を展示。また、鳥取市出身の霊長類学者、故・伊谷純一郎博士を詳しく紹介。霊長類の進化と多様性から「人間とは何か」というテーマに迫った。

### 企画展 ファインバーグ・コレクション展 江戸絵画の奇跡

10月5日～11月10日

入場者総数 9,041人

米国屈指の美術コレクターであるファインバーグ夫妻が収集した江戸絵画を中心とする日本美術の優れたコレクションを紹介した。会場は第1・第2・第3展示室および美術展示室で、コレクションから選りすぐりの優品約90件を展示した。



### 企画展 鳥取藩二十士と明治維新

11月23日～12月23日

入場者総数 3,110人

鳥取藩を揺るがした「因幡二十士事件」から150年という節目に、大事件の背景や与えた影響を幕末鳥取藩の動向から展示した。あわせて鳥取にとっての明治維新がどのような意味をもったのか問い直した。

### 企画展 シリーズ 鳥取の表現者 File.05 VARIATIONS — 絵画の多様性

1月11日～2月14日

入場者総数 1,650人

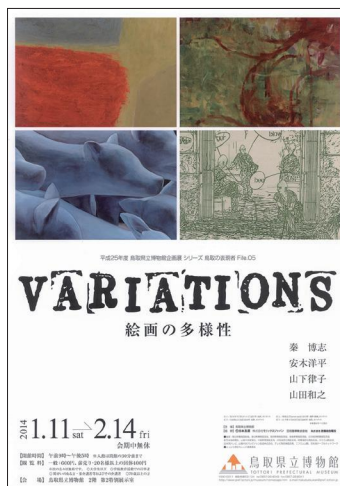
「鳥取の表現者」の第5回展として、鳥取県ゆかりの若手～中堅作家である秦博志、安木洋平、山下律子、山田和之の4人の作品を展示した。第2展示室を会場に、4つの個展を開催するかたちで、現在の絵画表現の多様な広がりを紹介した。

### 企画展 没後50年 菅楯彦展 — 浪速の粹、雅人のこころ —

2月22日～4月6日

入場者総数 3,723人

鳥取県出身で大阪で活躍した日本画家・菅楯彦の没後50年にあたり、その画業の全貌を紹介した。会場は第1・第2・第3展示室で、龍村平蔵による《天地逆旅》の大構想図をはじめ、屏風や掛軸など初期から晩年までの作品約200点を展示した。



平成26(2014)年度

企画展 ファレンツェ ピッティ宮近代美術館コレクション  
トスカーナと近代絵画

4月15日～5月27日

入場者総数 4,044人

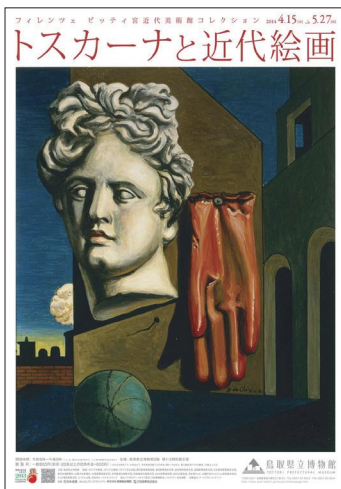
ピッティ宮殿の3階に位置し、トスカーナ地方の18世紀から20世紀までの美術作品を収蔵している美術館の優れたコレクションを紹介した。会場は第1・第2展示室で、計78点の展示によりイタリア近代美術の展開を日本で初めて系統的に紹介した。

企画展 大麒麟獅子展

6月7日～7月6日

入場者総数 2,906人

麒麟獅子舞は、江戸時代初期に鳥取池田家初代藩主光仲が創始したとされ、因幡地方一円に伝播する地方色豊かな民俗芸能でもある。鳥取県の重要な民俗文化財で有、国の記録作成を講ずべき無形の民俗文化財に選択されている麒麟獅子舞を可能な限り網羅紹介した。



企画展 胸キュン☆サンゴ展

7月19日～8月31日

入場者総数 11,726人

過去から現在にかけてのサンゴや生物礁の変遷を、骨格や化石資料を用いて紹介し、地球環境におけるその重要性を紹介した。また、鳥取の伝統産業であるサンゴ細工など、サンゴの文化的な側面にもスポットを当てた展示を行った。

企画展 シリーズ 鳥取の表現者 File.06  
流体 松本文仁／森田しのぶ

11月15日～12月14日

入場者総数 1,687人

「鳥取の表現者」の第6回展として、鳥取県出身の二人の画家・松本文仁と森田しのぶの作品を展示した。第2展示室を会場に、ともに自身の死生観をテーマとしながら対照的ともいえる表現が続けている二人の仕事を、計83点の作品で紹介した。

企画展 知られざるプロダクトデザイナー  
小島基と戦後鳥取の産業工芸

2月21日～3月22日

入場者総数 2,946人

富山県出身で戦後に鳥取県工業試験場などで活躍したプロダクトデザイナーの小島基がデザインし、県内の職人たちが制作した試作品等の現物資料を中心に、鳥取および日本の産業工芸の動向を紹介した。会場は第1展示室で、252点を展示した。



## 平成27(2015)年度

### 企画展 ポーラ美術館コレクション レオナルド・フジタ展 パリへの視線

5月16日～7月5日

入場者総数 6,704人

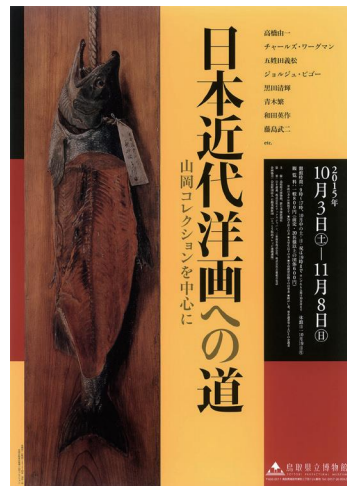
ポーラ美術館収蔵のフジタ・コレクション約160点により、パリ滞在の初期から再渡仏を経た1960年代までのフジタの画業を紹介した。会場は第1・第2展示室で、フジタの他、ルソーやピカソらフジタに影響を与えた画家たちの作品も紹介した。

### 企画展 大恐竜展

7月18日～8月30日

入場者総数 30,504人

全長約12mのティラノサウルスやその幼体“ジェーン”の全身骨格、世界最大の羽毛恐竜ユティラヌスなどの生体模型に加え、ティラノサウルス・ロボットなど約100点の資料で、恐竜の進化と生態を最新の研究成果に基づき時代ごとに紹介した。



### 企画展 日本近代洋画への道 —山岡コレクションを中心に—

10月3日～11月8日

入場者総数 4,184人

ヤンマー株式会社創業者の山岡孫吉が集めた日本近代洋画史上貴重な作品を中心に、司馬江漢から高橋由一、黒田清輝、青木繁などに至る日本の近代洋画の成立過程を示すことのできる186点の作品群を紹介した。会場は第1・第2・第3展示室。

### 企画展 戦後70年 鳥取と戦争

12月5日～1月11日

入場者総数 3,294人

戦後70年を節目として、平成7年から調査収集を進めた県内外の戦争関係資料をもとに、鳥取出身の将兵や郷土舞台、銃後の県民生活、戦時下子どもたちの姿を展示紹介した。また今後口頭伝承などが困難となるであろう「戦争遺跡」も紹介した。

### 企画展 シリーズ 鳥取の表現者 File.07 コウゲイノモリへ 探究する工芸家たち

2月27日～3月21日

入場者総数 2,822人

「鳥取の表現者」の第7回展として、染織の寺口敬子、船越久美子、山下早苗、山下健、陶芸の河本賢治、七宝の橋詰峯子、ガラスの矢野志郎、和紙の長谷川憲人の計8人の鳥取県ゆかりの優れた工芸家の仕事を、第2展示室を会場に紹介した。



平成28(2016)年度

企画展 昭和の洋画を切り拓いた若き情熱 1930年協会から独立へ

4月2日～5月22日

入場者総数 3,486人

前田寛治らが創立した1930年協会の結成90年にあたり、同協会とその後継団体の独立美術協会の活動に改めて注目し、当館の前田とその周辺の画家の収蔵品を軸に、時代に大きな影響を与えた画家たちの優品を紹介した。会場は第1・第2展示室。

企画展 宇宙への挑戦

7月23日～8月28日

入場者総数 13,360人

現代人の日常生活は人工衛星によって支えられている実態がある。私たちの生活と宇宙を結びつけながら、宇宙に関する科学技術の変遷をわかりやすく紹介し、私たちの心と宇宙を近づける展示とした。

企画展 日本におけるキュビズム  
ピカソ・インパクト

10月1日～11月13日

入場者総数 4,322人

1907年頃にパリに発生したキュビズムが日本でどのように受容され展開したかを探る展覧会(全国巡回展)。第1・第2展示室を会場に、国内の美術館所蔵のピカソとブラックの作品、および日本人作家たちの作品により、日本とキュビズムの関わりを検証した。

企画展 大◎荒神展

10月15日～11月6日

入場者総数 1,694人

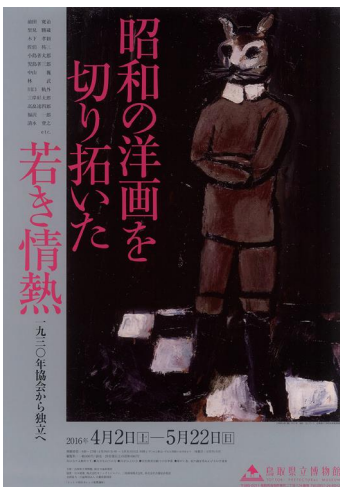
鳥取県西部において重要な民俗文化財である「伯耆の荒神祭」について、県内に伝わる荒神講の調査成果と、荒神に奉納される民俗芸能である「荒神神楽」の衣装等をあわせて展示紹介した。会場は、やがて開山1300年を迎える大山寺の圓流院であった。

企画展 ミュージアムとの創造的対話01  
Monument/Document  
誰が記憶を所有するのか？

2月25日～3月20日

入場者総数 1,505人

創造的な対話を重ねてミュージアムの可能性を広げることを目的とした新しい現代美術シリーズ展の初回展として、記憶をモチーフに、中ハシクシゲ、西野達、白川昌生の3人が館内および鳥取と米子のサテライト会場で様々な新作を展開した。



## 平成29(2017)年度

### 企画展 日本民藝館所蔵 生誕130年 バーナード・リーチ展

4月15日～6月4日

入場者総数 6,037人

鳥取県と縁の深い陶芸家リーチの生誕130年にあたり、日本民藝館が所蔵するリーチ最初期から晩年までの陶磁器を中心に約200点の作品や資料を第1展示室に一堂に展示し、日本人に愛された英国人陶芸家リーチの業績を紹介した。

### 企画展 つばさの博覧会

7月15日～8月27日

入場者総数 12,518人

飛行能力を獲得した昆虫、翼竜、鳥、コウモリの4グループについて、「つばさ」の特徴や体の構造等を展示・解説し、進化の中で獲得した「空を飛ぶための工夫」を紹介。あわせて鳥取県における鳥類の調査研究・保護活動とその実績を紹介した。



### 企画展 鳥取入府400年池田光政展 — 殿、国替えにござります —

10月7日～11月12日

入場者総数 4,005人

播州姫路42万石の城主池田光政が国替えによって、因幡・伯耆の2国を合わせた32万石の藩主となった元和3(1617)年から400年に当たる年に、現在の鳥取藩(県)の骨格を作ったともいべき池田光政の足跡を展示紹介した。

### 企画展 フジフィルム・フォトコレクション展

11月23日～12月24日

入場者総数 2,961人

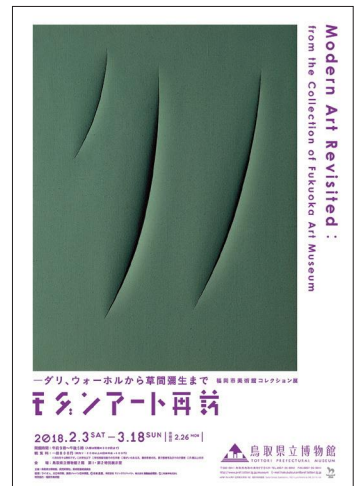
富士フィルム株式会社所蔵の日本の代表的写真家101人が撮影した、日本写真史に残る選りすぐりの作品を集めたコレクションを紹介した。会場は第1展示室で、鳥取県出身の塩谷定好、植田正治、田淵行雄、岩宮武二、杵島隆の作品も展示された。

### 企画展 モダンアート再訪 — ダリ、ウォーホルから草間彌生まで 福岡市美術館コレクション展 —

2月3日～3月18日

入場者総数 5,693人

福岡市美術館の1万6千点に及ぶ所蔵品から、主に第二次世界大戦後から2000年代までのヨーロッパ、アメリカ、日本の現代美術の優品76点による展覧会。会場は第1・第2展示室で、モダンアートの歴史を新たな視点から再検証することを試みた。



平成30(2018)年度

企画展 大いなる神仏の山 大山  
— その歴史と民俗 —

6月2日～7月1日

入場者総数 2,593人

伯耆国「大山開山1300年祭」の一環として、大山寺や大神山神社が所蔵する重宝を中心に、全国に点在する大山関係資料を一堂に展示した。また大山寺中興の祖・豪円関係資料も初公開した。企画展終了後に、米子市美術館特別共催展として一部巡回展示した。

企画展 ととりの化石EXPO!

7月14日～8月26日

入場者総数 11,873人

鳥取県下の化石産地からは、40種を超える新種が発見されており、生物進化の解明や古環境の復元に貢献してきた。県内の代表的な化石産地を中心に、産出した化石や古環境を紹介し、化石資料が豊富な鳥取県を再認識・再評価する展示を行った。

企画展 鳥取画壇の祖 土方稲嶺  
明月来タリテ相照ラス

10月6日～11月11日

入場者総数 4,655人

江戸時代の鳥取画壇を代表する絵師・土方稲嶺の画業を一望する展覧会。県内外の美術館や寺社、個人所蔵家から多数の作品を借用し、稲嶺と同時期に京都で活動した円山応挙や伊藤若冲の作品や資料も紹介した。会場は第1・第2・第3展示室。

企画展 ミュージアムとの創造的対話02  
空間／経験 そこでは何が起こっているのか?

11月23日～12月24日

入場者総数 1,676人

創造的な対話を重ねてミュージアムの可能性を広げることを目的とした新しい現代美術シリーズ展の第2回。「空間」とそこでの「経験」を主題に、梅田哲也、小山田徹、田口行弘の3人が、作品と鑑賞者との間に新たな関係性を開くことを試みた。

企画展 Our Collections! 鳥取県の  
アート・コレクションの、これまでとこれから

2月16日～3月10日

入場者総数 1,512人

県立美術館整備の動きに呼応し、さらに多くの方々に関心を持ってもらうため、美術館の核となる当館蔵品と、今後新しく収集を考えている様々な分野の作品について、他館や個人の所蔵品も借用・展示し、イメージしてもらう展覧会を開催した。

